



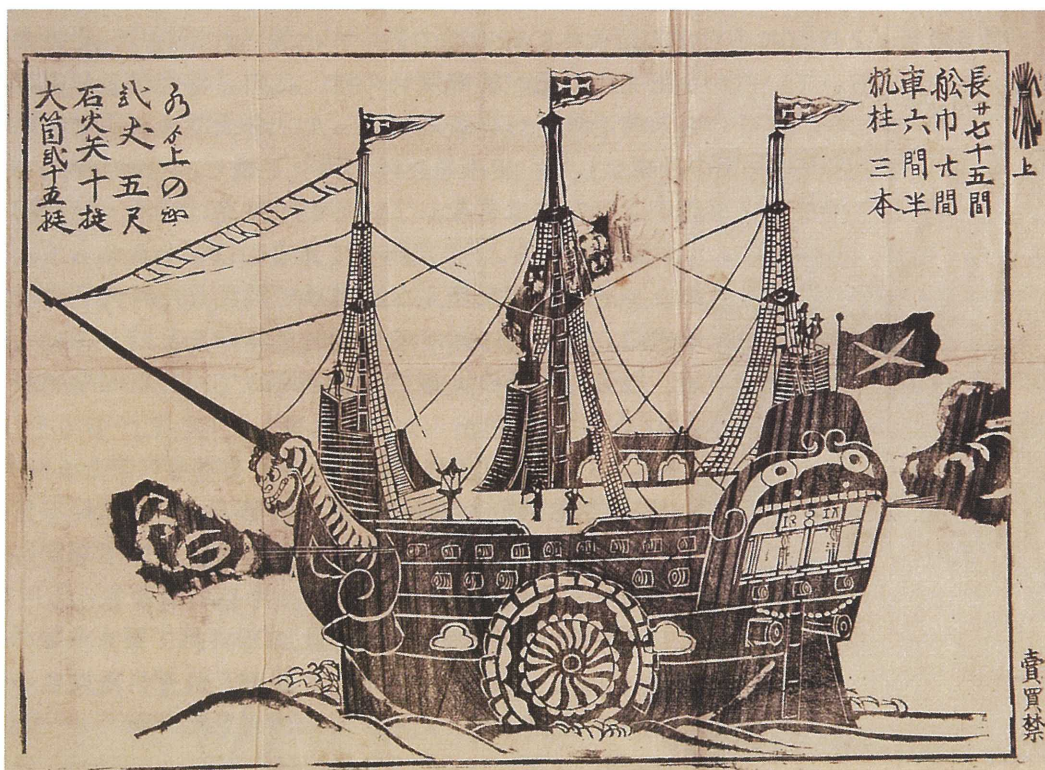
もくじ

展示紹介
黒船来航－幕末・明治の浮世絵－ P1
浮世絵で再考する日本の近代 P2～3
幕末・明治の多様な浮世絵/
二代目オニカゲ学芸員のページ⑦ 知られざる彫師の仕事 P4～5
浮世絵こぼれ話22 『格蘭氏伝倭文賞』：アメリカ大統領来日物語/
浮世場なれ/編集後記 P6

黒船来航 －幕末・明治の浮世絵－

会期

2025年11月12日(水)～12月14日(日)



「瓦版 黒船図 海陸御固御役人附」(抜粋) 国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館所蔵

嘉永6年(1853)の黒船来航により徳川幕府は大きく揺らぎ、その後、開国、明治維新と激動の時代を迎えます。幕末の混乱期、黒船来航を機に、江戸の庶民たちの間では、海外への興味が強まり、外国人や外国の風俗を描いた横浜絵と呼ばれる浮世絵が数多く描かれました。また、時代を風刺した戯画や新しい文化を描いた文明開化絵など、さまざまな表現が生まれます。

本展では、国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館、国際基督教大学図書館、M.ウィリアム スティール氏(国際基督教大学名誉教授)のご協力により、時代の変化の中で、多様な表現を見せる幕末・明治の浮世絵を紹介します。

浮世絵で再考する日本の近代

M. ウィリアム スティール (国際基督教大学名誉教授)

歴史とは何か？歴史家の使命とは何か？なぜ歴史を学ぶのか？これらの問いは、私を常にかりたてる。技術の発展にもかかわらず、過去の出来事において何が本当に起こったかを正確に知ることは不可能だ。そして、非テキスト資料、中でも画像資料の活用は、過去の像をさらに複雑なものにしていく。歴史は解釈であり、絶えず「思考」(thinking)と「再考」(rethinking)を求める。つまり、近代日本史の理解と叙述は絶えず変化し続けているのである。¹

私にとって、多くの歴史叙述(ストーリー)は、問いかけからはじまる。たとえば、「誰が日本を開国したのか？」といった質問への私の回答は、年月を経て変化してきた。今の時点では、ペリー提督の役割を強調することはなくなり、むしろ、日本人漂流民や、サンフランシスコ及び横浜で活動した商人たちの役割に焦点を当てている。50年ほど前に執筆した私の博士論文では、幕末期の勝海舟の思想と行動を研究した。現在、私はより社会史を意識し、「ボトムアップ」なアプローチで幕末から明治初期の時代を理解しようとしている。その考察においては、外交文書や公式記録ではなく、瓦版や浮世絵などの画像資料を多く活用しており、本稿では、通常の明治維新に至る経緯の研究とは異なる二つのストーリーを紹介する。

一つ目は、1868年半ばに発行されたイラスト付き年代記「嘉永年間より米相場直段并年代記書抜大新版」【図1】の分析だ。² これは、双六に似た形状をしており、16の場面から構成されている。1853年のペリー提督の来航から始まり、1868年の戊辰戦争までが記されている。各場面には、その年の主要な出来事と米相場の情報が記載され、代表的な出来事を絵で表している。このユニークな史料は、「明治維新」と呼ばれる日本の近代への転換期の最中に出版されており、当時の人々がどのような考えや感情を抱いていたかを伝えている。興味深いのは、この「年代記」が明確な歴史的叙述を示していないことだ。すなわち、明治維新への道筋となった「尊王攘夷」運動にはほとんど触れていない。むしろ、原因や結果の示唆なしに、出来事だけが淡々と続く。1860年の井伊直弼暗殺のような、政治的に主要な出来事のいくつかには言及しているが、焦点は経済・社会的ストレスと自然の破壊力—地震、疫病、洪水、火災—にある。「年代記」であるにもかかわらず、ちぐはぐな扱いは、当時の人々が、自分たちのコントロールを超えた出来事で混乱した時代を受け入れる困難さを示している。同時に、この「年代記」は歴史に対する脅威的な見方を反映している。より良い未来への進歩ではなく、自然、政治、社会、経済の災害が融合を遂げて、終末的な光景を描き出している。



【図1】「嘉永年間より米相場直段并年代記書抜大新版」スティール コレクション

この「年代記」に描かれたことをさらに詳しく紹介すると、経済問題、通貨の価値下落、物価の上昇、広範な貧困が特に強調されている。各場面の冒頭には、階級階層別にとって重要な米の価格が記されている。米100俵の金(両)での米価、庶民が金1両で買える米の量、100文銭で買える米の量といった、商人、庶民、そして貧民層がそれぞれ気になる米の価格情報が記載されている。この情報を読み解くと、米の市場は急激に上昇し、1853年の米100俵で49両から、1867年には429両に跳ね上がっていることがわかる。一方、一般市民の通貨である銅銭の価値は急落している。1853年には100銭で10合の米を購入できたが、1867年には同じ100銭でわずか1.1合しか購入できなかったとある。1866年の絵には、江戸の町中に設置された救済所が描かれており、貧民が大勢集まっている。1867年に収穫は改善されたが、経済状況はさらに悪化した。その年の出来事としては「諸色高直にて御救小屋達つ」、「南京米はじめてわたり、庶人これを買う」などが挙げられている。従来の生活は危機に瀕していた。

¹ マリオン・ウィリアム・スティール、『もう一つの近代：側面からみた幕末明治』、ペリカン社、1998年。Steele, M. William, *Alternative Narratives in Modern Japanese History*, RoutledgeCurzon, 2003. M・ウィリアム スティール、『明治維新と近代日本の新しい見方』、東京堂出版、2019年。Steele, M. William, *Rethinking Japan's Modernity: Stories and Translations*, Harvard University Press, 2024.

² Steele, *Rethinking*, "Apocalypse Now: A Bottom-up View of the Years 1853 to 1868," 29-56. This is a revised English version of a chapter published in Japanese, スティール、『明治維新』、「幕末黙示録—もう一つの見方」東京堂出版 63-121.

1853年から1868年の16年間は、日本が国際外交と貿易に積極的に参加し始めた時期であり、近代日本の誕生を象徴する中央集権化する国家統合のプロセスが進行した。しかし、この「年代記」によると、ほかにも多くのストーリーを見つけられる。これらの激動の時代を経験した人々の視点から語られる歴史があり、旧体制の崩壊の背景にある要因として、市民の混乱、経済的苦境、自然災害が果たした役割が明示されており、異なる要因の複雑な組み合わせがあったことを示している。

二つ目は、1868年という決定的な一年間において、一般市民の体験のより深い観察だ。このストーリーは、ある非伝統的な出典から導き出されている。「諷刺画」は、近代日本の誕生を特徴付けた経済的、政治的、社会的混乱の真っ只中で繁栄したメディアであった。諷刺画は、言葉遊び、比喩、象徴、誇張など、日本文化に長い伝統を継承した大量生産される木版画であった。江戸の街角で売られ、日常の出来事にユーモアを交えつつも、深刻な政治的・社会的批判を込めた作品であった。諷刺画には、よく子どもが遊ぶ姿が描かれていたが、その購入者は、これらの子どもが戦争中の武士に見立てられたものであり、おもちゃなどが実は銃や大砲であることを知っていた。ある諷刺画では、江戸に「闇雲」が漂い、世界が終わりに近づいていることを暗示していた。別の諷刺画では、庶民の「浮世」の姿を諷刺して、実に「憂世」の悪夢であることを示唆していた。³

たとえば、「万民おどろ木」【図2】は言葉遊びを用いて、1868年に江戸っ子たちが直面した問題の幅広い範囲を列挙した。他の諷刺画同様、作者と版元は不明であるが、文脈から、これは1868年4月ごろ、江戸城の開城直後に描かれたものと推測される。絵の右側には、木の下で酒、女、歌の楽しみを満喫する4人の男が描かれている。彼らは占領軍を象徴し、薩摩(着物に緋模様)と長州(萩の葉)が率いている。左側には、会津(蠟燭)、仙台(竹)をはじめ、東北列藩の徳川支持派の武士たちが描かれている。この政治的ドラマは、通常は幸運を象徴する「金になる木」の枝の下で展開されているが、画中の木の下には「世の中に金のちる木がふうとでき市中のなん木」と書かれており、ここでは不運を連想させる「なん(難)木」として描かれている。木の枝を構成する小さな文字には、約28の語尾が「木」で終わる「なん木」が列挙されており、その中には「かねもちむねがどきど木」、「あきなひもな木」、「江戸っ子いなかへにげゆ木」、「ぜにやすでだんだんあがるしよし木」、「下のえだはひどくなん木」、「くにぐにそうぞうし木」などが含まれる。つまり江戸の人々にとって、現在では「明治維新」と、近代の出発点として祝われている1868年は、決して幸せな年ではなかった。



【図2】作者不詳「万民おどろ木」
スティール コレクション

また、「子供遊竹馬尽し」【図3】では、元将軍徳川(一橋)慶喜が官軍に対抗する姿勢を失った姿を嘲笑したものである。1868年3月、慶喜は江戸城を退去し、上野の寛永寺で閑居に付され、皇室への服従を表明した。この諷刺画はおそらく初夏に描かれており、二つの子どものグループが竹馬で戦っている。右手が薩摩を先頭とする官軍側、左手が徳川の側である。左上には、「逃げるが勝て/ \」と言っている慶喜が明らかに臆病者として描かれ、激しい戦闘から逃走しており、1868年の戊辰戦争最中に江戸の庶民が体験した現実(流血、混乱、危機)を諷刺的に描いた版画である。1868年の一般市民は、自分たちが近代日本の誕生の一部であるとは思っておらず、その歴史観は後になって生まれたものである。



【図3】作者不詳「子供遊竹馬尽し」
国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館所蔵

私たち歴史家は問いを発し、過去において何が起こったのかを理解するため、創造的かつ批判的な思考が求められる。私の目標は、「近代日本」を考える上で、通念が変化する過去・現在・未来に対し、さらなる解釈を求め、それらの固定概念に挑む多様なストーリーが織り成す多角的で新たな視点を付け加えることである。歴史とは一つのストーリーではなく、むしろ複数のストーリーなのである。

³Steele, *Rethinking*, "That Terrible Year 1868: Satirical Cartoons and the End of an Era," 74-102. This is a revised English version of a chapter published in Japanese, スティール、『明治維新』、『恐ろしき一八六八年—風刺画から見る明治維新』東京堂出版122-152.

幕末・明治の多様な浮世絵

描かれた異国、描かれた日本

嘉永6年(1853)、ペリー提督率いるアメリカ東インド艦隊(黒船)の浦賀湾への来航は、江戸時代の人々に大きな衝撃を与えました。

初めて見る蒸気船を含む大型軍艦に、江戸時代の人々は脅威を感じるとともに強い興味を持ち、浦賀湾には大勢の見物客が押し寄せたといわれています。黒船来航の知らせは、幕府による触書や達書、瓦版などで、瞬く間に日本中に伝わりました。

安政元年(1854)、江戸幕府は日米和親条約を結び、鎖国政策が大きく揺らぎます。これまでに



【図1】落合芳幾「仏蘭西 和蘭」
国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館所蔵



【図2】「日本の特色：アメリカの日本遠征(週刊新聞『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』より)」ICU 図書館コレクション

なかつた異国との接触によって、江戸の人々は、外国船だけでなく異国に対して、さらに興味を深めていきます。来日した外国の人々や風俗を描いた横浜絵が多数制作されました。

【図1】の上部には、オランダ語と日本語との対訳が記されており、浮世絵に外国の言葉や風俗への興味を反映させていることが見て取れます。

一方で、イギリスで発行された挿絵付き週刊新聞「イラストレイテッド・ロンドン・ニュース」【図2】には、日本に関するニュースが取り上げられています。当時の「日本」もまた、海外において興味ある対象として紹介されました。

激動の幕末から明治維新へ

黒船来航以後、日本中で、開国派と鎖国派、倒幕派と佐幕派などの対立が深まります。度重なる外国人襲撃事件や安政の大獄などを経て、文久3年(1863)に第14代将軍家茂は、諸外国との対応に窮した状況の中、孝明天皇の求めに応じ上洛します。3代将軍家光以来、229年ぶりの徳川将軍による御上洛は、大ニュースとなって浮世絵に数多く描かれました。

幕末は、「薩英戦争」や「下関戦争」などの戦争や政情不安だけでなく、安政の大地震やコレラ・はしかの流行など、多くの災害が起こった時期でもありました。また、海外との貿易が始まったことにより、国内の経済は不安定になり、大幅なインフレによって米などの食料や日用品の価格が高騰し、庶民の生活は脅かされました。

慶應3年(1867)の大政奉還により、徳川幕府は終焉し、薩長を中心とした新政府が樹立しました。新政府軍がせまる中、旧幕府軍は江戸城を明け渡し、江戸は戦火を免れました。その後、新政府軍と旧幕府軍の間で戊辰戦争が勃発し、新政府軍が勝利します。

こうした時代の大きな転換点において、江戸や大阪などで、世相の移り変わりを描いた諷刺画が数多く摺られました。当時およそ300種類、合計30万枚にのぼる諷刺画が世に出回ったとされています。新聞がまだ刊行されていなかった当時、一般庶民には諷刺画が情報源でした。版元と浮世絵師たちは、検閲をくぐりぬけるために、子どもの遊びや源平合戦などの有名な昔の戦い、鳥や獣の合



【図3】三代歌川広重「おつの花子供の戯」
国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館所蔵

戦など、さまざまな形に見立てを使って表現しました。【図3】では、子どもの雪合戦に託し、画面右側に旧幕府軍、左側に新政府軍が描かれています。幕臣や新政府の要人を直接描くことができなかつたため、登場人物たちの着物や柄、屋号、家紋や持ち物などが、藩や人物を表しています。当時の人々は、絵に隠されたヒントをもとに、諷刺画を読み解いて楽しんでいました。

新しい文化と暮らしの変化

明治時代を迎え、海外との交易が活発になると、人々の暮らしも変わっていきます。洋風建築、電信柱、洋装、博覧会、動物園、ガス灯、洋傘など、さまざまな新しい事物が身の回りにあふれるようになりました。

「文明開化絵」や海外の事柄を紹介する版本も数多く出版されています。【図4】のように、旧来の日本で作られ使われていた道具と新し



【図4】歌川芳藤「本朝伯来 戯道具くらべ」
スティール コレクション

く輸入された道具が争っている戯画も描かれています。一気に進んだように見える文明開化も、人々の暮らしの中で反発や受容を繰り返しながら、徐々に受け入れられていった様子がかがえます。

幕末・明治の激動期にも発揮された浮世絵の多様性は、開国にともなって起こった異文化の流入により様変わりしていく人々の生活や心情を、現在の私たちに鮮明に伝えています。



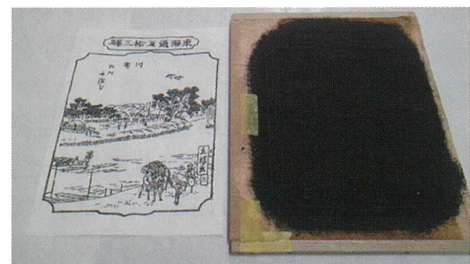
二代目オニカゲ学芸員のページ⑰ 知られざる彫師の仕事

浮世絵といえば北斎や広重などの絵師が注目されますが、絵が浮世絵になるには版元・彫師・摺師の存在も欠かせません。なかでも、彫師は浮世絵の出来を左右する重要な存在で、嘉永（1848-54）以降の浮世絵には彫師の名が彫られているものが多くみられます。

では、実際どのように版木が彫られるのか見てみましょう。まずは、浮世絵の版下絵を版木に貼り、その上から絵の輪郭線を残して版木を彫ることで、主版をつくります。できあがった主版を摺ると、【図2】のように浮世絵の全体図がみられます。この主版を摺った紙は校合摺きようごうずりと言われ、絵師が色を決める際に用いられます。絵師が色を指定すると、彫師は一色ごとに色版を彫り一つの絵の版木が完成します。そして、今度は版を摺る摺師に渡します。こうした共同作業のもと、一枚の色鮮やかな浮世絵が完成するのです。



【図1】



【図2】

浮世絵のぼれ話 22



ぐらんどし でんやまとぶんしょう

『格蘭氏伝倭文賞』：アメリカ大統領来日物語

戯作者である仮名垣魯文が明治12年(1879)に出版した『格蘭氏伝倭文賞』は、西洋人を題材にした明治に流行した読み物の一例です。当時、西洋の偉人などの伝記とともに文化、地理、政治・歴史といった幅広い要素を組み込んだ物語が多く出版されました。



【図1】仮名垣魯文・歌川国政画『格蘭氏伝倭文賞 三編』より歌舞伎演目「後三年奥州軍記」上演の様子。9代目市川團十郎演じる源義家が登場。

この作品は、第18代アメリカ大統領ユリシーズ・S・グラントの幼少から明治12年の日本来訪までが集約されたものです。一編と二編は、グラントの幼少期から南北戦争(1861-65)における北軍将軍としての活躍、そして大統領時代、退任後の二年間に及ぶ世界旅行のヨーロッパ編までが書かれています。第三編では、インドや中国を巡り、最終目的地の日本までの旅路とともに、来日時に開催されたさまざまな行事の様子が紹介されています。

史実によると、グラントを招き新富座で上演された「後三年奥州軍記」の演目は、グラントを源義家に見立て、物語にグラント伝記を組み入れたものでした。その様子が【図1】に描かれており、グラントの南北戦争で



【図2】仮名垣魯文・歌川国政画『格蘭氏伝倭文賞 三編』上中下巻の表紙を並べた図。右上にユリシーズ・S・グラント、左上にジュリア・グラント大統領夫人の肖像画が両極に描かれた構図。

の活躍を「後三年奥州軍記」の内容に組み込んだ文章を魯文が書いています。この芝居では、当時人気の9代目市川團十郎が主役を務め、終演後、彼の演技や演目を高く評したグラントが座主の守田勘弥に緋羅紗の引幕を贈呈しました。さらに、『格蘭氏伝倭文賞』の表紙や挿絵に登場するアメリカの旗を模した柄の着物は、「後三年奥州軍記」上演後に「げい者惣をどり」という舞を踊った芸者の衣装を再現しています。

編集後記

今回の展示では、激動期の幕末・明治に描かれた浮世絵を紹介しています。開催にあたり、国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館、ICU図書館、M. ウィリアム スティール氏から今回の展示に出品していただき、またスティール氏には本誌にご寄稿もいただき、多くのご協力を賜りましたこと、この場を借りて深く感謝申し上げます。普段は見ることのできない貴重なコレクションをお楽しみいただければ幸いです。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階

【電話】0466-33-0111 【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00~19:00(入館は18:30まで)

【休館日】月曜日(祝日、振替休日の場合は翌平日)

※その他、展示替えのために休館日がございます

【HP】[藤沢市藤澤浮世絵館](#)で検索

【公式Instagram】[fujisawa.ukiyoe](#)で検索

